



博物館2階の奥に、体験学習室という部屋があります。ここにはアジア各国の生活道具やおもちゃ、楽器などがあり、じかに手にとることができます。去年10月、当館学芸員がブータンを訪れ、資料の収集を行いました。彼の地での活動日誌をちょっと覗いてみましょう。



首都ティンブーの遠望

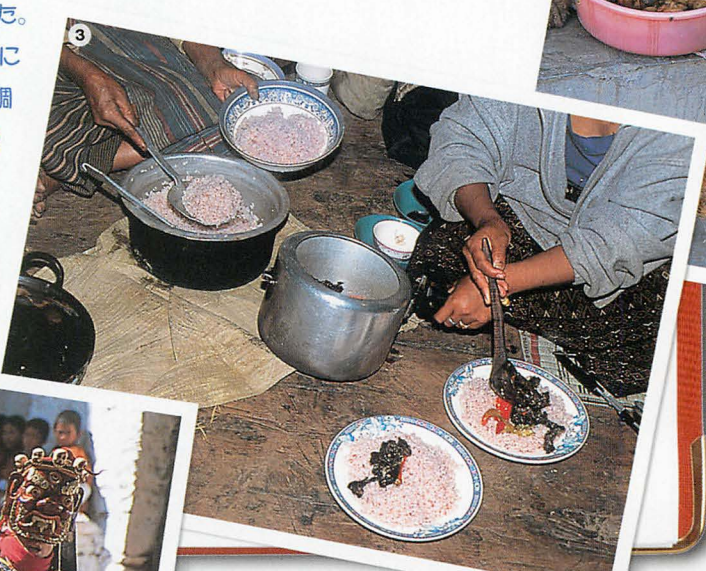
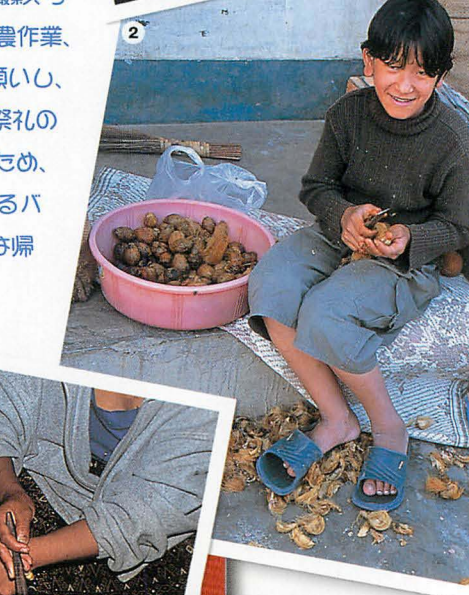
今回の体験学習室資料調査・収集で訪れたブータンは、ヒマラヤの東南麓、インドと中国の国境に挟まれた、ほぼ九州くらいの広さの王国である。10月1日(木)、同国唯一の国際空港のあるパロに到着した。谷間の小さな町の周囲は田園と山と川で日本の信州などを連想させた。今回の訪問は主にブータンの西部地域で、チベット系の人々が多く、仏教の影響で、様々な色彩の豊かなところである。しがしインドからも多くの人々が働きに来ていた。10月のこの時期は、ブータンが祭礼(チェチュ)中で、役所、学校、銀行などを始め国中が休みとなり、帰省したりするらしい。

公式ドレスとして定められた民族衣装をまとった通訳ケサン氏は日本語が達者、ガイドのテン氏もベテランで、調査と収集に強い味方を得た。

以下、概略を記すと、1、2日パロ周辺で、峠を隔てたハの地を訪問し、気候や地勢などに馴れた。同国は標高2500メートル前後で、少し高い峠などは軽く3000メートルを超えるため、高山病になるおそれもあった。車に乗りっぱなしで移動するにつれ、風景も独特な感じとなり、谷間や扇状地上の村々以外は、谷に沿って切り立った山々の中腹の細い道が続くのみだった。3日にはこじんまりとした首都ティンブーをへて、河畔の地ワンディユ・ポタンの地へ移動、4、5日と昔ながらの祭礼舞踊のビデオ撮影、写真撮影をおこなった。6日のティンブーへの帰路には、運転手サンゲ氏の奥家にホームスティ、農作業、炊事、家屋などを見学した。6日には古都プナカにも立ち寄り、機会を捉えて道路端の民家をお願いし、織物、農作業等の実地調査もした。7日は首都ティンブーで、巨大な王宮内での、ひとまわ派手な祭礼の調査をおこない、続いて8~11日に資料調査・収集を行った。日本と違い一般商店がほとんど無いため、良い民族衣装を集めた国営直売店を訪れ、一方、民具などは、安く、様々な品物が各地方から集まるバザール(市場)に出かけた。その間、伝統的な織物工場や紙漉工場、美術学校も見学した。12日には帰国のためパロへ移動、同地の国立博物館を訪ねた。なお同国東部(東南アジア系)や北部は、民族的に全く違っているとのことと、今後も引き続き調査等が必要であろう。

(又野誠)

- ① 地機を織る農家の親子(プナカ近郊)
- ② ドマ(嗜好品)の菓の皮をむくお店の少女
- ③ 一般家庭料理(ごはんに牛肉のとうがらしチーズ煮)
- ④ ワンディユ・ポタンのチェチュ(祭礼)の踊り



体験学習室新着資料公開  
**秘境!! ブータン** —その祭礼と日常—  
 平成16年7月22日(木)~8月29日(日)  
 体験学習室調査報告  
 『ブータンの人々とその暮らし』—学芸員が見たアジアpart9—  
 平成16年7月31日(土)午後1:30~3:30



# 梅上げのこと

『太宰府市史』に「女の四十四歳の厄落としは、四月四日四時四十分太宰府天満宮に参詣し（中略）境内の梅の木の下で、ひょうたん“酒を汲みかわす”とあります。これは福岡市内でもよく聞く話ですが、その経験者に出会うことはほとんどありません。にもかかわらず、多くの人がこの風習を知っており、実際に行っていないにもかかわらず語り継がれている不思議な行事です。



上下とも◎平成14年菅公千百年祭に繰り出した「博多梅上げたい」



さて、天満宮には数多くの梅の木があります。その奉納に際して「梅上げ」と呼ばれるパレードが行われていることを存じでしょうか。梅上げは、三月の吉日に還暦の男女や前厄の男性が、梅の木を牛に引かせ行列を組んで参拝するもので、しゃもじを打ち鳴らし紅白の餅を配りながら進みます。その起源は明治三五年（一九〇二）にあるとされます。この年行われた菅公一千年祭に、博多の老人会・高砂連が作り物屋台を引き、高砂囃子も賑やかに参拝しました。この派手なイベントが太宰府の人々の心をとらえ、以来、賀祝の行事として定着したらしいのです。梅上げ行事のルーツは、どうやらドンタクで培った博多の遊び心にあつたようです。（松村利規）

聴えないものを見、見えないものを見る。それが「聴耳図鑑」。変貌する北部九州の民俗を探る連載。

## こらむミュージアム

第12回

# 厳寒のシベリア紀行

一月下旬、福岡を大寒波が襲いました。例によって雪で交通網がめちやくちやだつたとか。ちょうどそのころ、私は零下二五度の世界にいました。シベリアのど真ん中、ノヴォシビリスクという町に滞在していたのです。「新しいシベリアの町」という名のこの町は、シベリア開発の拠点として発展し、現在でも人口百五十万の大都市です。郊外にはアカデミーゴールドという学園都市が建設されており、私が訪ねた科学アカデミーシベリア支部もその町にあります。

西日本で生まれ育った私にとつて、氷点下はまったく未知の世界でした。モスクワで耳当て付の帽子を買って完全防備で臨みましたが、さすがに寒さに慣れた国！建物や乗り物の中は完全暖房で、シャツ一枚でも過ごせるくらい。食べ物も新鮮な野菜や魚、肉が毎日おいしく食べられました。でも少し外を歩くとたちまち鼻の中が氷るという、めつたにない体験もできました。さて件の帽子は真ん中に赤い星が着いていたのでモスクワでは不評で、日本から持っていた二ツトの帽子に取り替えさせられました。都会のセンスには合わなかつたようで……。 （宮井善朗）

左◎シベリア考古学の父、オクラドニコフ博士のレリーフの前で/下◎タイガの夜明け

